大衆娯楽雑誌『平凡』と評論家大宅壮一

――ふたつの研究から見えてくるもの――

阪本博志

はじめに

――『『平凡』の時代』と「大宅壮一研究序説」――

今春、はじめての著書『『平凡』の時代――一九五〇年代の大衆娯楽雑誌と若者たち――』を昭和堂より上梓した。それとともに、『文学』二〇〇八年三・四月号特集「戦後大衆文化と文学――昭和三〇年代をよむ」に、「大宅壮一研究序説――戦間期と昭和三〇年代との連続性／非連続性――」を寄稿した。

これまでの研究を一書にまとめたものと新たな研究の序説とを、時を同じくして世におくりだしたことになる。小稿では、これらの概要を紹介した上で、『平凡』と大宅壮一の研究から見えてくるものについて、私見を述べたい。

『『平凡』の時代――一九五〇年代の大衆娯楽雑誌と若者たち――』について

『平凡』はもともと、平凡社創業者下中弥三郎によって一九二八年一一月に創刊され、わずか五号で休刊した雑誌である。一九四五年九月、『陸軍画報』発行人中山正男から用紙権を得た岩堀喜之助が、下中から誌名の登録権を譲りうけた。岩堀は、自身を代表とし清水達夫を編集長とする合資会社凡人社（のちに平凡出版株式会社、現株式会社マガジンハウス）を一〇月に創立し、一一月に最初の号（一二月号）を刊行した。当初はA5判の文芸娯楽雑誌であったが、一九四八年にB5判の〝歌と映画の娯楽雑誌〟にリニューアルを遂げる。（流行歌を伝える媒体である）ラ

ジオ・映画と立体的かつ複雑に結びついた同誌は、一九五〇年代前半に飛躍的な躍進を迎えた。一九五三年一月号は「百万部突破記念特大号」として発行され、一九五五年八月号は発行部数一四〇万部に達した。

拙著では一九八七年の休刊にいたる『平凡』の沿革を、ラジオ・映画・テレビといった各マスメディアとの相関関係から明らかにした。とくに一九五〇年代において最も愛読された大衆娯楽雑誌が『平凡』であったことから、この時期を「『平凡』の時代」として焦点をあてている。そして、『平凡』を軸としマスメディアを横断して展開された大衆文化のさまざまな企画を、再構成した。

当時の主要な読者層は、全国の男女の働く若者たちである。読者組織「平凡友の会」のメンバーは一〇万人を超え、全国各地はおろかブラジルでも活発な活動を展開していた。おそらく、雑誌の読者組織としては日本の歴史上最大規模のものと考えられる。また、雑誌の「送り手」にあたる人びとの多くも「若者たち」であった。本書では、「送り手」「受け手」であった人びとに対し実施した広範なインタビュー調査で得たデータを用い、「一九五〇年代の大衆娯楽雑誌」をめぐる「若者たち」の姿を描きだした。

そこにおいては、一九五〇年代の『平凡』を考える上で欠かすことのできない三人の方からいただいた証言も紹介している。それは、「三人娘」（美空ひばり・江利チエミ・雪村いづみ）のなかで唯一ご健在である雪村いづみ氏、ラジオ番組「平凡アワー」の司会を長く務められた玉置宏氏、そして京都大学経済学部在学中の一九五三、五四年に『平凡』読者と大学生との大規模な文通運動を展開された西村和義氏である[1]。

このようにして本書では、雑誌を軸に一九五〇年代の大衆文化を再構成するとともに、雑誌をめぐる「送り手」「受け手」それぞれの若者たちのありようを明らかにした。その過程では、カラー一二五点、モノクロ九五点の貴重な図版を用いて詳細な検証をおこなっているので、ぜひ参照されたい。

従来一九五〇年代の日本社会は、東西冷戦を背景とした左右対立の時代だと論じられてきた。それに対し本書では、「『平凡』の時代の若者たち」を視野に含めて一九五〇年代をまなざすことで、この図式をどのように書き換えられるのかを、探究している。本書は、その影響力の大きさにもかかわらず研究の乏しかった『平凡』に関する、はじめてのまとまった著作である。

「大宅壮一研究序説――戦間期と昭和三〇年代との連続性／非連続性――」について

いっぽう、「一億総白痴化」「駅弁大学」などの造語で知られる評論家大宅壮一は、一九〇〇年に生まれ、本格的な編集・評論活動を戦間期に開始している。当時は、都市を中心に大衆社会状況が到来した時期であるが、その波がしらを都市の社会風俗にとらえたり、小説や評論が（芸術作品ではなく）商品と化していることを認識し、左翼的見地から論評を加えている。また社会主義的発想のもと「知的作業の集団化」を提唱するとともに、みずからが主宰した翻訳団や雑誌『人物評論』において実地に移している。後者の編集において用いられた集団執筆のありかたは、初の出版社系週刊誌『週刊新潮』創刊時（一九五六年）に彼の弟子草柳大蔵によってそのまま実行された。このシステムの採用は、出版社系週刊誌が続々と創刊されることを可能にした。

戦間期においては左翼の評論家であった大宅であるが、一九五五年に「『無思想人』宣言」を発表する。「マスコミの王様」「マスコミの帝王」「マスコミ天皇」「マスコミ教祖」などの呼称をこのころからほしいままにした彼は、アレゴリーと造語を駆使した独特のわかりやすい表現で、新聞・月刊誌・週刊誌・ラジオ・テレビといったメディアにおいて広範な領域の事柄を論評する。浅沼稲次郎は「カラスの鳴かぬ日はあっても、大宅壮一の声を聞かぬ日はない」と言ったと伝えられる。

しかし、一九六四年に体調をくずした上に一九六六年に長男・歩に先だたれ精神的打撃を受け、一九七〇年にこの世を去った。昭和三〇年代にあたる一九五五年から一九六四年は、マスメディアの基盤が整地されるとともに大宅自身の心身のコンディションがあいまって到来した、「大宅壮一の時代」だったといえる。

大宅における戦間期と昭和三〇年代とを見るとき、連続性／非連続性のねじれを見いだすことができる。前者は、大衆社会状況の到来を都市部の風俗にとらえる感覚や、評論を商品と見なす認識を、抱き続けたことである。後者は、「マルクス主義の原理という」「大前提」（鶴見俊輔）を離れ、自由な評論活動を展開したことである。

大宅に関する評伝は数多いが、大宅のライフヒストリーをトータルに把握しメディア史・社会史的背景との関連から分析した学術的研究は乏しい。それを志向した「序説」たる拙論においては、戦間期と昭和三〇年代との連続性／

非連続性をメディア史・社会史的背景とともに把握した上で、大宅の今日的可能性を考察した。『『平凡』の時代』「大宅壮一研究序説」とも、ご一読いただきご批判を頂戴できれば幸いである。

『平凡』と大宅壮一から見えてくるもの

それでは、学術的蓄積が意外にもすくなかった『平凡』・大宅壮一について明らかにしていくことで、何が見えてくるのであろうか。「『平凡』の時代」「大宅壮一の時代」の歴史的背景からそれを考えていきたい。

一九五〇年代は、復興から本格的な高度成長に向かう戦後社会における過渡期であるとともに、メディア史的な過渡期だと考えられる。一九五一年にはラジオの民間放送が、一九五三年にはテレビの本放送が開始される。一九五八年にピークを迎えた映画館の年間述べ入場者数・ラジオの受信契約数は、皇太子ご成婚というテレビ時代のメディア・イベントのあった一九五九年から、下降線をたどっていく。活字メディアに目を向けると、『週刊新潮』をかわきりに一〇年間で五〇誌以上の週刊誌が創刊される週刊誌ブームが到来した。週刊誌発行部数が月刊誌のそれをうわまわったのは、やはり一九五九年である。

このメディア史的背景にかんがみるとき、「『平凡』の時代」は、テレビの本格的な普及以前にラジオ・映画が主要なメディアであった当時、この両者と結びついたマスマガジンが圧倒的な支持を得たものである。また「大宅壮一の時代」は、独特のわかりやすい表現で幅広い領域を扱う彼が、一九五〇年代半ばから新たなマスメディアが台頭するなか、新旧のメディアにおいて活躍を見せたものである。このように、一九五〇年代から六〇年代にかけてのマスメディアと大衆文化を考えていく上で、『平凡』と大宅とをマクロなメディア史的連続性に沿って見わたすことができる。

しかしながら、視野を近現代メディア史・社会史に広げると、『平凡』と大宅とを対置させることの意義はそれだけにはとどまらないであろう。すなわち、政治史・思想史的にも考察を深められるべき大宅の転向という、戦間期と昭和三〇年代との非連続性が存在するからである。さらには、大宅が左翼的見地から考案した、集団による人物論の執筆という方法論が、冷戦下に資本主義が進められていくなかでのメディア環境の形成に寄与するという、パラドキシカルな事態をも見いだすことができる。

通例、戦間期と高度成長期とが論じられる際、その連続

性が強調されることが多い。それに対し、戦間期の大宅・「『平凡』の時代」・「大宅壮一の時代」にメディア史・社会史的な検討を加えることで、一九五〇―六〇年代の大衆文化を連続したものとしてとらえるとともに、戦前との非連続性や逆説的なものをも把握することが可能になろう[2]。このことにより近現代メディア史／社会史の新たなパースペクティブを構築することができるのではないか[3]。そしてそれこそが、このふたつの研究をとおして目指すものだと考えている。

【註】

1　西村氏に関しては、拙稿「ニュー・エイジ登場」第三回『週刊読書人』二〇〇三年二月一四日号二面、同「一九五〇年代の関西における大衆文化研究の展開――雑誌『平凡』読者との文通運動と中心者西村和義のライフヒストリー――」『MKCRニューズレター』第五号、武庫川女子大学関西文化研究センター、二〇〇六年を参照されたい。

2　拙著においては、『平凡』における戦前との連続性についても若干言及している。

3　『平凡』を軸とする大衆文化の展開と大宅の広範囲にわたる活動全体とを、それぞれ面的なものととらえると、既述の関係が見られるのみならず、それぞれの面に共通するいわば「点」を見いだすことができる。

たとえば、大宅は一九四一年一二月、太平洋戦争不可避の状況下、ジャワ派遣軍宣伝文化部隊に徴用されるが、この人事において大宅を推したのは、『陸軍画報』の中山である（中山正男『毒舌一代　大宅壮一を裸にする』太平出版、一九六六年、一六、一七頁）。また大宅は、下中にも近い位置にあり、下中が『平凡』を廃刊したとき、「『平凡』の廃刊と大衆雑誌の将来」という一文を発表している（『中央公論』一九二九年四月号。『大宅壮一全集』第二巻所収）ほか、下中の人物論もものしている（『昭和怪物伝』、一九五七年。『大宅壮一全集』第一三巻所収）。

いっぽう岩堀は、一九四四年一二月に大政翼賛会宣伝部で同僚として清水と出会っているが、このあと清水を中山の事務所に案内し、紹介している（清水達夫『二人で一人の物語　マガジンハウスの雑誌づくり』出版ニュース社、一九八五年、一八―三二頁）。さらに岩堀は、中山から用紙の権利を譲りうけたとき紹介状をしたためてもらい、下中を訪ね『平凡』の誌名の権利を得る（『創造の四十年　マガジンハウスのあゆみ』マガジンハウス、一九八五年、一九―二一頁）。岩堀らによる最初の『平凡』の巻頭に「平凡談義」を寄稿した新居格は、戦前大宅と日本フェビアン協会で活動した人物である。

本文で述べたメディア史的・社会史的な事柄のみならず、このような点と点とをつないだ「点と線」から、ふたつの面上を葉脈のようにはしる、戦前戦後にわたる人間関係の水脈が見えてこよう。

大宅と『平凡』との接点に関しては、『出版ニュース』一九五二年五月中旬号巻頭特集「歌と映画の娯楽雑誌〝平凡〟の人気を診断する」に、「徹頭徹尾の視覚性」と題した一文を寄せている。この特集では、編集部による岩堀へのインタビューも掲載されている。大宅と岩堀との直接の接点としては、『丸』一九五五年三月号

で対談がおこなわれている（「大宅壮一世界漫遊帰国談　日本は住みよい国か」）。タイトルからも分かるようにこれは、彼の代表的な著作のひとつ『世界の裏街道を行く』シリーズ（一九五五―一九六二年）の取材の体験談が語られたものである。

財団法人大宅壮一文庫における一九五〇年代の『平凡』の所蔵状況は、一九五〇年一冊、一九五二年一冊、一九五五年九冊、一九五六年から一九五九年は毎年一二冊である。躍進期のものがほとんどないことから、大宅が『平凡』に対して抱いた興味はそれほど深くはなかったように思われる（大宅文庫の『平凡』所蔵状況については、財団法人大宅壮一文庫『創立十周年記念　大宅壮一文庫索引目録』財団法人大宅壮一文庫、一九八〇年、二八八頁、同『大宅壮一文庫索引目録新訂第二集』同、一九八三年、四三六頁を参照）。このことからも、大宅の広い守備範囲のなかで芸能は比較的手薄な領域だったようである。

なお、小稿においてふたつの著作を紹介するなかで言及した事柄のうち、引用文献はそれらにおいて挙げているため、引用源の明示は、本脚注の事項のみにとどめている。下中の『平凡』と岩堀の『平凡』との連続性については、拙著の帯にいただいた鶴見俊輔氏の推薦文において触れられている。岩堀・『平凡』と大宅との接点に関しては、新井恵美子氏・糸川英穂氏・清田義昭氏からいただいた教示を参考にしている。記して感謝したい。

付記　本文中で紹介したふたつの著作のなかで明記しているように、これらの研究の過程においては、平成一四・一五年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）・平成一九年度財団法人宮崎学術振興財団助成金を受けている。